



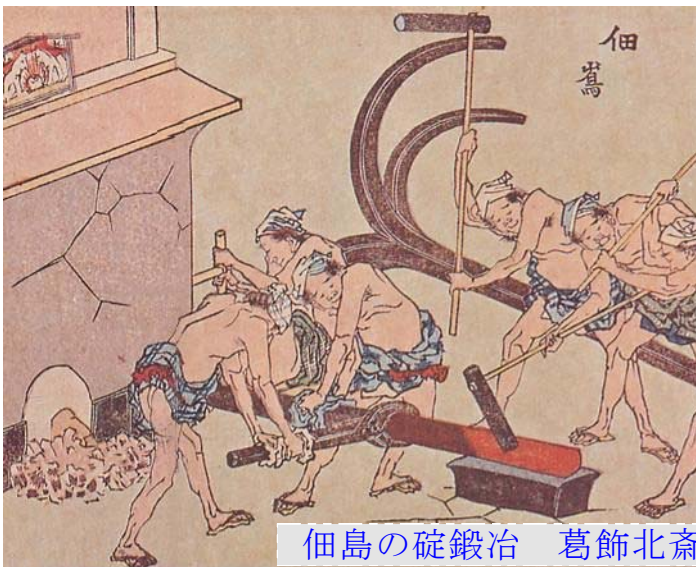
『家康の大砲』（2）もう一つの疑問

家康の大砲の寸法は全長3.13m、口径9.3cmと書かれていました。外形は33cmメジャーで大まかに計り、この寸法をもとに重量を推測すると2トン弱になり、本には（453貫目＝1.7トン）と記載がありました。明治以来、その製法は議論されましたが1985年新日本製鐵（株）の調査により鍛接であることと、その構造が判明しました。

しかし、私の知るところ江戸時代の鍛接品で最も大きかったのは、千石船に使われた100貫目（375kg）の碓です。この絵は佃島の碓鍛冶を葛飾北斎が描いたものです（江戸時代末期）。中国、明の時代に描かれた『天工開物』には300斤（約1.8トン）の碓を作ったと描かれています。

この大砲、もちろん部分部分の鍛接ですから初めはそんなに重くなかったのですが、最終工程は全重量がかかってきます。453貫目も重量のある大砲はどんな炉で加熱されたのでしょうか。どんなふいごを使ったのでしょうか。木炭は？？木製のクレーンなどを使ったのでしょうか？火箸はどんなもの？？どんどん疑問がふくらんでゆきます。

尾栓に挿入されていた丸環は鍛接部より外れていました。片方に大きな部品の着いたものを鍛接するのが困難だったに違いありません。丸環の太さは8分（25φmm）内径6寸（180φmm）か？正確に寸法を測っていれば良かったと後悔しています。



佃島の碓鍛冶 葛飾北斎



砲身の内面
写真 藤代興里 様
近代の大砲のような
ラセンは入っていません。



鍛接部がはずれた丸環

天工開物 宋応星 著 1637年刊。

『天工開物』は中国、明の時代末に書かれた産業技術書です。この本には農産物・衣服・火器・金属製品などの製造法が挿絵入りの詳細な記述で体系的にまとめられています。その中の一つに錨の製造法があります。

靖国神社 遊就館（ゆうしゅうかん）蔵撮影の許可を頂いた靖国神社さま、
写真を撮影して頂いた、研ぎ師、藤代興里さまご協力頂いた方々に感謝します。

参考図書

鉄 立川 昭二 学生社 昭和44年
火縄銃の伝来と技術 佐々木 稔 編 吉川弘文館 2003年

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
<http://www.kanamonoya.co.jp/ryou@memenet.or.jp>

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！